

次の文は、長く住んだ自分の家が取り壊される前日の「私」の姿を描いた小説の一節である。主人公の「私」は、戦後間もない時期にこの家を建て、会社を定年退職した現在も妻と二人でここに暮らしている。これを読んで、あとの問に答えよ。(五〇点)

毅夫が初め私に提案したのは、今の家の建替えではなかった。彼は土地も家も売って、郊外へ移ろうと言ったのである。二番目の子供が生まれて、いかにも手狭になった社宅住まいを切上げたくなつたのであろう。それには借金をして独力で建てるよりも、行くゆくはどのみち自分の物になる親の財産を活用した方が利口だと計算したのであろう。そうした考え方を私は咎めはしない。私だつていつかは彼の一家と同居する心積りはしていたのだから。しかし、何事にも周到な彼が郊外分譲地のパインフレットを持つてやつて来たとき、自分でも予期しない反撥心が湧いた。恐しく吹きつ曝しの所だな、と丘陵を開拓した造成地の写真を見て、私は言った。それに夢見ヶ丘とはよく恥かし気もなく付けたものだ。まあ今は殺風景だけでも、と毅夫は逆らわなかった。家を建てて木を植えればすっかり変わりますよ、木を育てるのは、お父さん、楽しみじゃないですか。木が育つまで俺が生きてるわけがない、とは流石に私は言わなかった。毅夫は用意したメモを見ながら、その夢見ヶ丘なる土地に住む利点を次つぎに挙げた。取り分け彼が強調したのは陽当りであつた。きつと冬でも陽灼けするよ、お父さん。

ものの百米とは離れていない荒川の堤防の上に高速道路が構築されて以来、私の家の環境は変わってしまった。騒音こそさほどではないが、日照が失われたのが、私には応えた。冬場は二時を過ぎると、高速道路の影が家を覆うのである。そうなるからしばらく、私は、陽の翳る時刻が近づくと庭へ出て、高速道路の向うへ意外な早さで陽が隠れて行くのを、いまいましてみつけていたものだ。陽の色が消えると、俄かに周りに寒さが立ちこめるような気がする。私はわざと大きな嚏をして妻に笑われたりした。私がそんな風だつたのを、毅夫も当然知っていたであろう。

毅夫の説明は、そのほかすべてについてそつがなかつた。陽の当らぬ下町の低湿地から陽光あふれる郊外の高台へ。自分たち一家の利害が基本にあるとは言え、彼が精一杯に誠意を尽そうとしてゐる事は疑いようがなかつた。いい息子だな、と私は皮肉でなく言った。お前は息子で苦勞しないで済んでるから羨しい、と同僚に言われた事が思い出された。確かに毅夫は出来

がいいとは言えぬまでも、手間のかからぬ息子である。小学校から大学まで際立つた成績は示さなかつた代りに、中位以下に下りもしなかつた。高校、大学の受験と就職試験に一度も失敗しなかつたのは、彼が常に自分の能力で手の届く範囲を慎重に計量した結果である。お前みたいなのは一流にはなれんぞ、と酔つたまぎれに私が言つたとき、一流とか二流とかそんなこだわり方は時代遅れだ、と彼は答えた。私の自分の性格への秘かなこだわりを、彼は見抜いていたかも知れない。

なるべく急いで検討してみて下さい、と毅夫はパンフレットや契約説明書を私の方へ押し寄越した。その必要はないよ、と私は押返した。この家を売る気はないからね。ここで曖昧な態度を示してはいけない、と私は思った。毅夫の指図は受けな
いとこの私の意志が、語氣を通して伝わるように喋つたつもりであつた。

それから紆余曲折があつた。妻が間に立つた。妻は毅夫の話を私より先に聞いて、内心私の賛成を期待していたらしい。どうせあたしの方が後に遺つてあの子の世話になつて暮すのだから、あの子の気に入らない事はさせたくない、と言つた。私は黙つていた。妻は毅夫の社宅へ泊りがけで出掛け、今の家を壊して、跡地に二世帯が階上階下に分れて住める家を作る案を、大凡の費用分担保まで含めて決めて来た。いいだろう、俺だつて何もお前と二人きりでいたいわけじゃない、と私は言つて、これでまた人に羨まれる種が増えた、と思つた。気の優しい息子の家族と暮す安定した老後。まさにその通りには違
⁽³⁾いない。

世間の眼から見れば、最初の毅夫の主張は筋の通つた常識的なものだつたらう。しかしそれに反対した私の言い分も、あながち無法だつたとは思わない。そしてその中間を取つて、現実的な案が立てられ、実行に移された。私も、これより良い解決策はなかつたと思つている。私と息子と双方に対する妻の氣遣いには、感謝している。それなのに、自分の持ち物を無体に取り上げられたような虚しさに加えて、憤りまで湧くのは何故だろう。

今日、朝の間は出掛けるつもりはなかつた。残る一日を古い家の中で落着いて過したい気持もあつた。だがいつもと同じに朝食を済まし、二階の座敷に座つて、知人の好意で定期的に廻してもらつてゐる翻訳の仕事をぼつぼつやつてゐるうちに、居たたまれなくなつて来たのである。黒ずんで所どころが反り返つた杉板の天井や、把手の廻りに手脂の染みが付いた北窓の

硝子障子、箆筒を退けた痕がくつきりと青白く遺っている。今日限りで消えてしまうものが、私に向つて群がり寄つて来るような気がした。私がもう少し昔者であつたなら、家霊に責められていると感じたであろう。私は追われるように階下へ降り、台所で片付物をしている妻に、飯を食いに銀座へ出ないか、と声をかけた。あたしは用があつてそれ所じゃない、と素気ない返事が返つて来た。それにこんな日は、あなた一人の方がいいんじゃないの、その代り、帰りにデパートで晩の物を見繕つて買つて来て下さい。こんな日、と妻は微かに笑いを含んで言った。私が一人で感傷に耽りたいのだとも思つたのだから。まあ、それだつて構わない。

(高井有一「半日の放浪」より)

問一 傍線部(1)について、「私」はなぜ、「自分でも予期しない反撥心」を感じたのか、説明せよ。

問二 傍線部(2)の、「私」と「妻」の気持ちについて、それぞれ説明せよ。

問三 傍線部(3)には、「私」のどのような気持ちがこめられているか、説明せよ。

問四 傍線部(4)について、「私」の気持ちはどのようなものか、説明せよ。

問五 「私」は、傍線部(5)の妻の言葉についてどのように感じているのか。妻の気持ちと合わせて説明せよ。

次の文を読んで、あとの間に答えよ。(五〇点)

浮世絵はその木板摺^{ずり}の紙質と顔料との結果によりて得たる特殊の色調と、その極めて狭少なる規模とによりて、まことに顯著なる特徴を有する美術たり。浮世絵は概して奉書^{ほうしょ}または西之内^{にしの内}に印刷せられ、その色彩はみな褪^さめたる如く淡くして光沢なし。試みにこれを活気ある油絵の色と比較せば、一つは赫々^{かくかく}たる烈日の光を望むが如く、一つは暗澹^{あんたん}たる行灯^{あんどん}の火影^{ひかげ}を見るの思ひあり。油絵の色には強き意味あり主張ありて能^よく制作者の精神を示せり。これに反して、もし木板摺^{ずり}の眠気^{ねむげ}なる色彩中に制作者の精神ありとせば、それは全く専制時代の萎^ひ微^びしたる人心の反映のみ。余はかかる暗黒時代の恐怖と悲哀と疲労とを暗示せらるる点において、あたかも娼婦^{すず}が啜^{すす}り泣きする忍び音を聞く如き、この裏悲^{うらがな}しく頼りなき色調を忘るる事能^{あた}はざるなり。

余は現代の社会に接触して、常に強者の横暴を極むる事を見て義憤する時、翻^{ひるがへ}つてこの頼りなき色彩の美を思ひ、その中に潜める哀訴^{あいす}の旋律^{メロデー}によりて、暗黒なる過去を再現せしむれば、たちまち東洋固有の専制的精神の何たるかを知るとともに、深く正義を云々するの愚なることを悟らずんばあらず。希臘^{ギリシャ}の美術はアポロンを神となしたる国土に発生し、浮世絵は虫けら同然なる町人の手によりて、日当たり悪^あしき横町の借家に制作せられぬ。今や時代は全く変革せられたりと称すれども、要するにそは外観のみ。一度^{ひとたび}合理^{まこと}の眼を以てその外皮を看破せば、武断政治の精神は毫^{ちひ}も百年以前と異なることなし。江戸木板画の悲しき色彩が、全く時間の懸隔なく深くわが胸底に浸^しみ入りて常に親密なる囁^{ささや}きを伝ふる所以^{ゆえん} A けだし偶然にあらざるべし。

余は何が故か近来、主張を有する強き西洋の芸術に対しては、^Bさながら山岳を望むが如く、ただ茫然としてこれを仰ぎ見るの傾きあるに反し、一度その眼を転じて、個性に乏しく単調にして疲労せる江戸の文学美術に対すれば、たちまち精神的ならびに肉体的に麻痺^{まひ}の慰安を感じざるを得ず。されば余の浮世絵に関する鑑賞といひ研究といふが如き、もとより厳密なる審美の学理に因るものならず。もし問ふものあらば、余はただ特別な事情の下に、特別な一種の芸術を喜ぶと答へんのみ。いはんや泰西人の浮世絵に関する審美的工芸的研究は、既に遠く十年前全く細微^わに渉りて完了せられたるにおいてをや。

余は既に幾度か木にて造り紙にて張りたる日本伝来の家屋に住し、春風秋雨四季の氣候に対する郷土的感覺の如何を叙述したり。此の如く脆弱にして清楚なる家屋と此の如く湿氣に満ち變化に富める氣候の中に棲息すれば、かつて廣大堅固なる西洋の居室に直立闊歩したりし時とは、百般の事おのづから嗜好を異にするは、けだし当然の事たるべし。余にしてみしまロック皮の大椅子に横たはりて図書室に食後の葉巻を吹かすの富を有せしめば、おのづからピアノと油絵と大理石の彫刻を欲すべし。然れども幸か不幸か、余は今なほ畳の上に両脚を折り曲げ、乏しき火鉢の炭火によりて寒を凌ぎ、簾を動かす朝の風、廂を打つ夜半の雨を聴く人たり。清貧と安逸と無聊の生涯を喜び、醉生夢死に満足せんと力むるものたり。曇りし空の光は軒先に遮られ、障子の紙を透かしてここに特殊の陰影をなす。かかる居室に適應すべき美術は、先づその形小ならざるべからず、その質は軽からざるべからず。然るに現代の新しき制作品中、余は不幸にしていまだ西洋の miniature または銅版画に類すべきものあるを見ず。浮世絵木板摺はよくこの欠陥を補ふものにあらずや。都門の劇場に拙劣なる翻訳劇出づるや、朋党相結んで直ちにこれを以て新しき芸術の出現と叫び、官營の美術展覽場に賤しき画工ら虚名の鎬を削れば、猜疑嫉妬の俗論轟々として沸くが如き時、秋の雨しとしと降りそそぎて、虫の音次第に消え行く郊外の侘住居に、倦みつかれたる昼下がり、尋ね来る友もなきまま、独りひそかに浮世絵取り出して眺むれば、ああ、春章、写樂、豊国は江戸盛時の演劇を眼前に髣髴たらしめ、歌麿、栄之は不夜城の歡樂に人を誘ひ、北斎、広重は閑雅なる市中の風景に遊ばしむ。余はこれに依つてみづから慰むる処なしとせざるなり。

注(*)

奉書、西之内Ⅱ紙の名称

miniatureⅡ細密画

(永井荷風「浮世絵の鑑賞」(大正二年)より)

問一 傍線部(イ)(ロ)を分かりやすく説明せよ。

問二 第一段落で述べられた油絵と浮世絵の特徴について、対比的に説明せよ。

問三 筆者が傍線部Aのような判断を下す理由を述べよ。

問四 西洋の芸術に対する筆者の受け止め方はどのようなものか。傍線部Bの譬え^{たと}を踏まえながら述べよ。

問五 筆者が今の生活の中で浮世絵を愛好する理由を簡潔にまとめよ。

次のA・Bの文を読んで、あとの間に答えよ。(五〇点)

A 粟田殿(藤原道兼)の御男君達ぞ三人おはせしが、太郎君は福足君と申ししを、幼き人はさのみこそはと思へど、いとあさましうまさなう悪しくぞおはせし。

東三条殿(藤原兼家)の御賀に、この君舞をさせ奉らむとて、習はせたまふほども、あやにくがり、すまひたまへど、よろづにをこつり、祈りをさへして、教へきこえさするに、その日になりて、いみじうしたて奉りたまへるに、舞台の上に昇りたまひて、物の音、調子吹き出づるほどに、わざはひかな、「吾は舞はじ」とて、角髪ひき乱り、御装束はらと引き破りたまふに、粟田殿、御色ま青にならせたまひて、あれかにもあらぬ御気色なり。ありとある人、「さ思ひつることよ」と見たまへど、すべきやうもなきに、御をちの中閨白殿(藤原道隆)の下りて、舞台に昇らせたまへば、「言ひをこつらせたまふべきか、また、憎さにえ堪えず、追ひおろさせたまふべきか」と、かたがた見侍りしに、この君を御腰のほどに引きつけさせたまひて、御手づからいみじう舞はせたまひたりしこそ、衆もまさりおもしろく、かの君の御恥もかくれ、その日の興もことのほかに増さりたりけれ。祖父殿(藤原兼家)もうれしとおぼしたりけり。父大臣はさらなり、よその人だにこそ、すずろに感じ奉りけれ。かやうに人のためになさけなさけしきところおはしましけるに、など御すゑかれさせたまひにけむ。

この君、くちなは凌じたまひて、そのたたりにより、かしらに物はれて、亡せたまひにき。

(「大鏡」より)

B 福足といひ侍りける子の、遣水に菖蒲を植ゑをきて亡くなり侍りにける後の年、生ひ出でて侍りけるを見侍りて

粟田右大臣

しのべとやあやめも知らぬ心にもながからぬ世のうきに植ゑけむ

(「拾遺和歌集」より)

注(*) をこつるはだましますかす、機嫌をとる。

問一 傍線部(1)について、

(イ) 現代語訳せよ。

(ロ) 「さ」が指示する部分を、原文のまま抜き出せ。

問二 傍線部(2)を、「さ」が指示する内容が分かるように現代語訳せよ。

問三 傍線部(3)を現代語訳せよ。

問四 傍線部(4)の「亡くな」った事情は、A文から知られる。それを現代語で述べよ。

問五 B文中の歌の、「あやめ」は「菖蒲」の意と「文目」すなわち物事の道理・分別を掛けている。また「うき」は「憂き」と「渥」すなわち水分の多い泥深い地を掛けている。それに留意して歌の意味を解説せよ。

問題は、このページで終わりである。